

分, donor site に seroma を3例に認めた他は重篤な合併症はない. 1例を除き術後照射はしていないが局所再発例は最長8年の観察期間で経験していない. 長期観察でも乳房の変形は認めず左右対称性がよく保たれていた.

同手術は安全かつ簡便であり, 乳房温存手術における局所コントロールと美容の両立に貢献するものと思われる.

6) 乳癌肝転移に対する生体の日周リズム (Circadian rhythm) に基づいた多剤併用肝動注療法 (FLMP 療法) の試み

長岡 弘・横森 忠紘
 家里 裕・鴨下 憲和
 餐場 正明・矢端 義弘 (小千谷総合病院)
 高他 大輔 (外科)

これまでに我々は生体の日周リズムを考慮し, 投与方法を工夫した多剤併用化学療法 (FLMP 療法) を考案し, 消化管腫瘍に対する優れた有効性を報告してきた. 今回, 乳癌肝転移3症例に対し FLMP 肝動注療法を行い, 有効と考えられたので報告する.

症例1は41歳女性. 左乳癌 (T2a, N1b, M0) 術後7年6ヵ月で多発性肝転移を認め, FLMP 肝動注療法を5クール施行した. 2クール後には CR となり, CR 期間は497日間継続したが, 癌性胸膜炎および肝転移が再燃し死亡 (再発後生存期間641日) した.

症例2は57歳女性で, 右乳癌 (T2a, N1b, M1 (肝, 骨)) の術後より FLMP 肝動注療法を8クール施行した. 2クール後に PR となり, PR 期間は496日間継続したが, 肝および骨転移が増悪し, 現在, MPA + 5'-DFUR にて外来治療中

症例3は41歳女性で右乳癌 (T2a, N0, M0) 術後1年で肝 S4 に転移を認め, FLMP 肝動注療法を5クール施行した. 2クール後には CR となり, 現在も継続中であるが, 動注施行7ヵ月後に骨転移を認め現在放射線治療中である.

FLMP 肝動注療法施行中, 副作用は軽微で, grade 3以上は極めて少なかった.

生体の日周リズム (Circadian rhythm) を考慮した本法は副作用が少なく, 有効性が期待できる治療法と考えられた.

7) UFT の血管新生阻害作用についての基礎検討

馬崎 雄二・米倉和比古
 近久 ルミ・橋本 章弘
 青柳空美夫・宮寺 和孝 (大鵬薬品工業(株))
 山田 雄次 (第一がん研究所)

固形腫瘍の増殖や転移の過程においては, 腫瘍内新生血管の誘導が重要な役割を担っている. 今回, UFT の血管新生抑制機序を解明する為, 種々の検討を行った. RENCA 株を用いた DAS 法において, UFT およびその構成成分 Tegafur, 代謝物 5-FU, GHB, GBL にも血管新生抑制作用が認められた. 各代謝物の抑制作用は持続投与で増強され, 5-FU と GHB の併用効果も認められた. 各種腫瘍株を用いた DAS 法の結果, 20 mg/kg の UFT 投与により 6/7 株で血管新生は明らかに抑制され, その効力は 5-FU および 5'-DFUR より有効であった. 次に, 血管内皮細胞に対する作用を検討した結果, 5-FU は VEGF 依存性の細胞増殖, 細胞遊走, さらに管腔形成を抑制し, GHB にも VEGF 依存性の細胞遊走および管腔形成に対する阻害効果が認められた. また, rhVEGF を用いた DAS 法においても, UFT およびその代謝物には明らかな血管新生抑制作用が認められた. 以上の結果から, UFT の血管新生抑制効果は, VEGF 依存性の血管内皮細胞の増殖, 遊走, 管腔形成に対する 5-FU と GHB の作用が関与していると示唆された.

8) 乳癌骨転移に対する Bisphosphonate 療法

林 光弘・高橋 修一
 畠山 悟・野村 達也
 大森 克利 (厚生連魚沼病院)
 佐藤 信昭・畠山 勝義 (新潟大学 第一外科)

【症例】53歳女性

【主訴】胸背部痛

【臨床経過】平成元年10月25日, 他院にて右乳癌と診断され非定型的乳房切除術 (Br+Mn+Ax) を受けた. 病理診断は充実腺管癌, n0, ER+, PgR+, であった.

平成3年まで UFT 300 mg/day TAM 30 mg/day の術後補助療法を受け, その後しばらく無症状で経過していたが, 平成8年12月より胸背部痛が出現. 疼痛が増強してきたため平成10年1月21日, 当院整形外科受診. 胸椎 MRI 検査にて腫瘍による骨破壊と考えられる圧迫骨折を認めたため, 2月5日当科紹介となった. 入院後 X-p, シンチグラフィ, CT, MRI を施行し胸椎,